

## 聖霊降臨後第十九主日（9月25日の聖書箇所）

### I 第一朗読（アモス6章1―7節）

- 1 災いだ、シオンに安住し  
サマリアの山で安逸をむさぼる者らは。  
諸国民の頭である国に君臨し  
イスラエルの家は彼らに従っている。
- 2 カルネに赴いて、よく見よ。  
そこから、ハマト・ラバに行き  
ペリシテ人のガトに下れ。  
お前たちはこれらの王国にまさっているか。  
彼らの領土は
- 3 お前たちの領土より大きいか。  
お前たちは災いの日を遠ざけようとして  
不法による支配を引き寄せている。
- 4 お前たちは象牙の寝台に横たわり  
長いすに寝そべり  
羊の群れから小羊を取り  
牛舎から子牛を取って宴を開き
- 5 堅琴の音に合わせて歌に興じ  
ダビデのように楽器を考え出す。  
大杯でぶどう酒を飲み  
最高の香油を身に注ぐ。  
しかし、ヨセフの破滅に心を痛めることがない。
- 7 それゆえ、今や彼らは捕囚の列の先頭を行き  
寝そべって酒宴を楽しむことはなくなる。

#### 言葉の解説

■紀元前8世紀の中頃、北イスラエルはヤロブアムによって、領土を拡大させ、富を享受できる階層を生み出した。アモスは、彼らに踏みじられて苦しむ人々に目を向け、彼らを批判した。

1節■「災いだ」。3頁②の「言葉の広がり」を参照。■「シオン」。エルサレムのこと。アモスが預言活動を行ったのは北イスラエルだから、この語をおかしいと考える学者は「その誇り」に読み替える。  
■「安逸をむさぼる者」。動詞バータハ（信頼する）の分詞形。信頼を置くべきものを間違えた人たち。  
4節■「寝そべり」。この動詞は「手足をゆったりと伸ばす」の意味。7節にも使われている。■「羊の群れから」。直訳すれば、「羊の群れからの小羊、牛舎からの子牛を食べる」。必ずしも宴の食事とは限らないが、文脈から考え、何人かが集まる宴なのだろう。  
5節■「歌に興じ」。この動詞はハバックス（旧約に一度しか使われない言葉）なので、意味が不明。■「考え出す」。この動詞ハーシャヴ（思う）はここでは「考案する」の意味。酒宴の中で、いろいろな物を楽器に見立てて、馬鹿騒ぎをしているのだろうか。

6節■「最高」。この語レーシートは名詞ローシユ（頭）と同根の言葉で、「最初・最上・要人」の意味。1b節の「諸国民の頭である国」の「頭」はこのローシユ。■「ヨセフの破滅」。ここで「破滅」と訳された語は「骨折」をも表す。「ヨセフ」はイスラエルの別称。

7節■「先頭」。6節の「最高」と同根の名詞ローシユ。諸国民の「頭」であるべき国が、「最高」の香油に心を奪われているので、彼らは捕囚の「先頭」を行くことになる。

①アモスが活動したのはヤロブアム王の時代である。この王は王下一四25が「ハマトの入り口からアラバの海まで領域を回復した」と述べるように、支配領域をほぼソロモンの時代に匹敵する広さに回復させた王である。このような成功を手にできたのは、北の強国アッシリアでは王の権力が弱体化し、外に向けて力を発揮することができなくなっていたからである。こうしてヤロブアムはユーフラテス川の近辺まで支配を広げること成功した。この支配領域の拡大は、北イスラエルに多くの富をもたらした。それはアモ三12に

主はこう言われる。

羊飼いが獅子の口から二本の後足

あるいは片耳を取り戻すように

イスラエルの人々も取り戻される。

今はサマリアにいて豪華な寝台や

ダマスコ風の長いすに身を横たえていても。

とあるように、「今はサマリアにいて豪華な寝台や、ダマスコ風の長いすに身を横たえる」人々が現れた。しかし、このアモ三12にはアイロニーが隠されている。サマリアで安逸な生活を送る人々は、盛大な祭儀を祝う人だったから、自分たちに裁きがあるとはゆめゆめ思っていない。不運が襲ったとしても、神が「取り戻してくれる」と信じきっている。それを知るアモスは、「お前たちの言うとおりに、確かに取り戻されるだろうが、二本の後足、あるいは片耳として取り戻されるだろう」と警告している。

このアイロニーは出二二12の規定を踏まえている。それによると、主人から羊を託された羊飼いは、羊が野獣に襲われたとき、たとえ「二本の後足」であれ、「片耳」であれ、野獣から取り戻さねばならなかった。自分が羊をくすねたのではないことを証しする証拠品が必要であり、それがあれば、羊の持ち主に弁済する必要はなかった。しかも、ここで「取り戻す」と訳された動詞は「救う」の意味でも使われる言葉である。自分たちは「救われる」取り戻される」と過信している人々に対して、確かに「救われる」取り戻される」けれども、「二本の後足」、あるいは「片耳」の姿で、つまり野獣にかみ殺された証拠品となって「取り戻される」と、アモスは告げている。

今日の朗読でも、「サマリアの山で安逸をむさぼる者」たちが登場する。彼らは「象牙の寝台」に横たわり、「長いす」に寝そべり、「小羊」や「子牛」を取って宴を開き、「豎琴」に合わせて歌に興じ、大杯で「ぶどう酒」を飲み、「最高の香油」を身に注いでいる。このような贅沢な生活ができるのは少数の上流階級にかぎられていて、多数の貧しい者は、さらに富を増やそうと躍起になる彼らに踏みつけられ、苦しみの声をあげているが、欲望を膨らませた彼らの耳は鈍感になり、それを聞くことができない。

アモスはその無関心さを指摘して、「しかし、ヨセフの破滅に心を痛めることがない」と嘆く。ここで「破滅」と訳された言葉は、レビ二一19「手足の折れた者」手に骨折のある、あるいは足に骨折のある者」では、「骨折」の意味で使われている。ここでヨセフはイスラエルのことだから、イスラエル社会が骨折を起こし、金持ちと貧しい者とに分解しているのに、それに痛みを覚えない鈍感さが非難されている。

快適な生活の追求は隣人から目をそらさせ、さらには弱く貧しい者を踏み台にしていることをも忘れさせてしまう。確かに、豊かな生活を享受できる者はそれなりの努力をして、豊かさを手に入れたのである。しかも、他人を踏み台にしているとは思ってもいないから、その痛みがわからず、実におおらかに豊かな生活を楽しんでいる。しかし、アモスはその無頓着さを批判し、滅びの到来を警告する。アモスのアイロニーは単なる「皮肉」ではなく、あるべき姿から逸脱した社会を目にした者のうめきなのである。

なお、9月18日の第一朗読となるアモス8章4-7節には、利潤追求に熱中する者が落ち込む過ちが次のように語られている。

4 このことを聞け。

貧しい者を踏みつけ

苦しむ農民を押さえつける者たちよ。

5 お前たちは言う。「新月祭はいつ終わるのか、穀物売りたいものだ。安息日はいつ終わるのか、麦を売り尽くしたいものだ。エファ升は小さくし、分銅は重くし、偽りの天秤を使ってごまかさう。6 弱い者を金で、貧しい者を靴一足の値で買い取るう。また、くず麦を売ろう。」

7 主はヤコブの誇りにかけて誓われる。

「わたしは、彼らが行ったすべてのことを

いつまでも忘れない。」

②り——災いだ・ホーイー——

この語は旧約聖書で51回使われるが、王上二三30以外は、すべて預言書での用例である。王上二三30「なんと不幸なことよ、わが兄弟」では、死んだ人をいたむ間投詞として使われているが、預言書にも同じような用例が見られ、エレ三四5「人々は、あなたのために香をたき、『ああ、王様』と言って嘆くであろう」はこれに属している。

このような用例から進んで、神からの懲らしめを導入するための間投詞として使われている。例えば、イザ一4「災いだ、罪を犯す国、咎の重い民。…彼らは主を捨てた」とか、イザ五8「災いだ、家に家を連れ、畑に畑を加える者は」とか、イザ四五9「災いだ、土の器のかけらにすぎないのに、自分の造り主と争う者は」がそのような用例である。

しかし、イザ五五1「渇きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい」では、訳出されていませんが、冒頭にこの語が置かれており、もはや嘆きの意味合いは消え、相手への積極的な呼びかけとなっている。

次に「持ち上げて、担う・持ち運ぶ」を表す。荷物や武器などいろいろなものを「担う」とを表すが（創三七25）、特に、罪に使われる。カインは神に断罪されたとき、「わたしの罪は重すぎて負いきれません」と叫んだように（創四13）、人は犯した罪を担うことはできない。そこで、年に一度の贖罪日に、イスラエルの人々のすべての罪を雄山羊に「背負わせ」、無人の地、荒れ野に追いやった（レビ一六22）。

最後に「持ち上げて、取り去る・赦す」ことをも表す。罪は人間の力では処理しきれないから、罪を「赦された」者は幸いだ、と詩編作者は歌う（詩三一・5）。実に神は罪と背きと過ちを「赦す」方である（出三四7）

## Ⅱ第二朗読（テモテへの手紙Ⅰの6章11－19節）

11 しかし、神の人よ、あなたはこれらのことを避けなさい。正義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和を追い求めなさい。12 信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。命を得るために、あなたは神から召され、多くの証人の前で立派に信仰を表明したのです。13 万物に命をお与えになる神の御前で、そして、ポンテイオ・ピラトの面前で立派な宣言によって証しをなさったキリスト・イエスの御前で、あなたに命じます。14 わたしたちの主イエス・キリストが再び来られるときまで、おちどなく、非難されないように、この掟を守りなさい。15 神は、定められた時にキリストを現してください。神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、16 唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることでできない方です。この神に誉れと永遠の支配がありますように、アーメン。17 この世で富んでいる人々に命じなさい。高慢にならず、不確かな富に望みを置くのではなく、わたしたちにすべてのものを豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。18 善を行い、良い行いに富み、物惜しみをせず、喜んで分け与えるように。19 真の命を得るために、未来に備えて自分のために堅固な基礎を築くようにと。

Ⅲ福音(ルカ16章19―31節)

19 「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。20 この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、21 その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。22 やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。23 そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。24 そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』25 しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きていた間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はまだえ苦しむのだ。26 そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があつて、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』

27 金持ちは言った。『父よ、ではお願いします。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。28 わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』29 しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』30 金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行つてやれば、悔い改めるでしょう。』31 アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があつても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』

言葉の解説

19 節 ■「金持ち」。この金持ちは贅沢に生活し、門前に横たわるラザロに目を留めようとしなない。ルカは「金持ち」を自分の利益と享樂しか求めない者として描く(一二13―21)。5頁②の「言葉の広がり」を参照。■「紫の衣や柔らかい麻布」。紫の衣は上衣として、麻布は下着に用いられ、金持ちや王侯貴族の着衣とされていた(エス八15、箴三一22)。

20 節 ■「ラザロ」。イエスのたとえに登場する人物の中では、この「ラザロ」が唯一名前を持つ人物。エレアザルという名の短縮形で「神は助ける」という意味。

22 節 ■「アブラハムのすぐそばに」。直訳すると「アブラハムの胸に」となる。ユダヤ的比喻表現で、「先祖(族長たち)のもとに集められる」と同じ意味を表す(士二10、創一五15、四七30、申三一16参照)。「…の胸に」は親密な関わりを意味する(ヨハ一18)。またこの表現はラザロがアブラハムの隣でもたれかかっているメシアの宴会の描写とも考えられる(マタ八11、ヨハ一三23)。

24 節 ■「父アブラハムよ」。金持ちは、同じ血筋であることにすがって救いを求める。27・30節も同様である。それに対してアブラハムも「子よ」(25節)と答えて血縁を認めている。しかし、血のつながりは救いには何の役にも立たない。

29 節 ■「モーセと預言者」。旧約聖書を指す表現。ここでは貧しい人々、自分より弱い立場の人たちへの憐れみと優しさを勧告する書とされている(四18、イザ五八6―7)。ルカでは「モーセと預言者」を信じないことはイエスを信じないことに通じる。

①高価な衣服を身にまとう金持ちの家の門前に、できもので身を包んだラザロという名の貧しい人が横たわっている。金持ちは毎日贅沢を楽しんでいたが、孤独なラザロは空腹に苦しむが、彼に近寄ってくるのは不浄な動物とされる犬だけである。金持ちの食卓からは、毎日多くの残飯や、手を拭うために使ったパンくずが落ちてくる。それで空腹を満たしたいと思っていたラ

ザロだが、それすら与えられることはなかったと思われます。

ラザロが横たわっていたのは金持ちの門前である。門は家の中と外をつなぐ入口だが、金持ちはそこにいるラザロに目を向けることがない。ラザロにとって門は閉ざされた「裂け目」にすぎない。

二人の死後、その境遇は逆転する。金持ちは死んで「葬られた」とあるから、盛大な葬式で葬られたにちがいない。しかし、ラザロは墓に葬られもせず、「天使たちによって連れて行かれ」た。人間の目には隠されているが、両者の逆転が始まっている。ラザロが運ばれたところは、原文によれば「アブラハムの胸」である。それは、胸に抱かれる子供の平安を表すと同時に、天の祝宴での最高の席を表している。一方、生前に贅沢を尽くした金持ちは、陰府の炎の中で苦しんでいる。散々飲食を楽しんだ「舌」は、今や熱と渇きのためにたった一滴の水を求めている。

生きている時に悪いものを受けたラザロは今「慰められて」いる。ラザロという名前は「神が助ける」の意味である。しかし、神がラザロを助けたのは彼の徳によるのではない。むしろ、イエスが語った「貧しい人々は、幸いである」（六20）という神の国の秩序が実現したからである。

陰府の炎にもだえ苦しむ金持ちは、ラザロに水を運ばせるように頼むが、金持ちとラザロの間には「大きな淵（＝裂け目）」があって、それは不可能なことである。生前、門を「裂け目」にしていた金持ちは、今は新たな「裂け目」に苦しんでいる。金持ちは生きている間に自分の富を貧しい人と分かち合っておくべきだったのだ。死後、二人の境遇は逆転してしまうが、もはやそれを覆す手立てはない。

金持ちだった人物はラザロを遣わして、兄弟に警告して欲しいと願うが、アブラハムはそれを断り、彼らは「モーセと預言者」（旧約聖書）に聞けばよいと答える。しかし金持ちは、聖書の言葉よりも奇跡にせがろうとする。なぜなら、かつて自分がそうであったように、兄弟たちも聖書に耳を傾けていないことを知っているからだ。しかし、アブラハムは、聖書の言葉に耳を傾けないなら、たとえ奇跡を見ても金持ちの兄弟は変わらないと言って、彼の願いを退ける。金持ちは「奇跡」が悔い改めへの入口になると考えているが、アブラハムは「聞く」ことこそ入口だと説く。聞くことがなければ、奇跡を見ても、その意味を悟れない。

この世に生きる者には、天の国を垣間見ることが許されていない。しかし、神の言葉を「聞く」ことはできる。「聞く」ことこそが救いと滅びの分岐点になる。パウロが「信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」（ロマ17）と述べるように、イエスに「聞く」ことが永遠の命をもたらす。

さらに「聞く」ことは、今の生き方を変えてゆく。私たちはこの世をふさわしく生きるために、イエスの言葉に耳を傾け、永遠の命を信じるのであろう。

## ②言葉の広がり―金持ち・ブルーシオス―

この語は宗教的な意味での「豊かさ」を表すこともある。例えば、神は憐れみ「豊か」であり（エフェ24）、キリストは「豊か」であったのに、貧しくなった（2コリ89）といった用例である。しかし、多くは文字通りの意味で使われ「財産の豊かさ＝金持ち」を表す。イエスの遺体を引き取ったアリマタヤのヨセフ（マタ2757）や、神の救いにあずかった徴税人の頭ザアカイ（ルカ一九2）のような「金持ち」もいるが、「金持ち」が神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通るほうがまだ易しい（マコ125）とイエスが説くように、富を持つことは神との関わりを疎かにさせ、隣人との関係をないがしろにさせる原因になりかねない。そこで、永遠の命への道をイエスに尋ね求めた「金持ち」が、財産を売り払って貧しい人に施せ、と聞くと悲しみながら去ってゆくことになる（ルカ一八23）。

今日の福音でも、生前に貧しい者への配慮を欠いたがゆえに、死後に陰府で苦しむ「金持ち」が登場する。

#### IV 今日の朗読から

サマリアの山で安逸をむさぼる者は

アモスは「ヨセフの破滅に心を痛めることのない」人々を批判していますが、ここで「破滅」と訳された語は「骨折」をも意味します。ヨセフ、つまりイスラエル社会が骨折を起こしているのに、鈍感で、痛みを覚えない人々がいます。彼らは根っからの悪人ではありません。先週の朗読にあったように、安息日にも店を閉めたくないと考える商売熱心な人かもしれません。こうして彼らは富を蓄え、それを用いて、今日の朗読が述べるような優雅な生活を送っています。アモスが批判するのは贅沢な生活そのものではありません。むしろ、富を増やそうと血眼になる彼らの利己的な行動が、貧しい者を踏みつけ、社会に骨折を起こしていることに気づかない無頓着さを非難します。

命をお与えになる神の御前で

そのような人はまさに「安逸をむさぼる者」ですが、私たちは彼らを笑うことはできません。バブルに踊り、今は、はじけたバブルに苦しんでいるからです。バブルの絶頂期には、誰の目にも異常な値段が土地につけられました。土地そのものの価値とは無関係の値踏みであって、だからこそバブルと呼ばれたのでしょう。しかし、バブルが端的に示すように、人間の目は十分に評価する能力に欠けているとするなら、ものの真価を決めるのはいったい誰なのでしょう。パウロは「神の御前で」決まると考えています。だからこそ、テモテに取るべき態度を教えるときに、「…神の御前で、…キリストの御前で、あなたに命じます」と述べています。

もだえ苦しむ

第一朗読で「安逸をむさぼる者」と訳された語は、動詞「信頼する」の分詞形で「信頼しきっている者」の意味ですが、人間の目に価値ありと映る富に信頼しきっているとき、「安逸をむさぼる者」といった悪い意味になります。今日の福音に登場する金持ちもその一人でしたが、死後、陰府の炎の中で「もだえ苦しむ」ことになります。大きな淵があって、天の助けを期待できないと知った金持ちは、ラザロを兄弟に送ってほしいと願いますが、「モーセと預言者（＝聖書）」があると断られます。

バブル崩壊に苦しむ私たちは、陰府にいるのではないので、まだ遅くはありません。「モーセと預言者」を読んで信頼するものを取り替えるなら、苦しみから抜け出せます。